

の様に見ゆ葉を喰、筋をのこして、其葉茶袋の如し巢の小なる時枝を切捨べし、捨置ば冬に至て虫皆根もとに下り、枯葉の下或は土中に寒を凌て、春に至て草木の芽出を喰、又桃梅林檎等の實を食、大に害をなす、林檎海紅等に一種の毛蟲を生ず、三四月頃一葉巢になり、段々ふへて一枝皆蜘蛛の巣の如になり、葉を残さず喰盡、巣の小なる時、葉を取、枝を剪て遠く捨べし、其まゝ置時は枯木の姿となる、或は云、此虫後にみのむしとなりて、外の木へ移、葉又は實を喰害をなす、菊虎は形螢に似てほそ長し、菊艾類の宿根より生ずるといふ、故に菊は古根を植うべからず、四月頃早朝に出て、菊艾類の若ばへを吸からし跡へ卵を産置なり、其吸たる跡二ヶ所横に筋あり、下の吸めより折取て、莖を二ツに割ば、中に黃色の長き卵あり、其まゝ置時は、菊の心に喰入て、蛙となる、秋になりて菊俄に枯るもの也、さんせうむしは、形てんとうむしに似て黒く甲羽あり、夏の頃瞿麥の花を喰事、又柳に集りて葉を食ふ、又酸漿にも集り葉を食もの也、節々拂べし、蛞蝓、蠋牛は草木の葉を喰事、毛蟲の如し、遠へ捨べし、鼈鼠は草木を根を掘あげ害をなす、珍重なる植物は、竹にて簾をあみ、土中に埋、其中に植ば來らず、又妙法あり、海參を切て所々へ埋置ば、遠く逃去と云、なまこは虫を除ものなり、鉢うゑ類に蚯蚓升ときは、水抜惡なり、植物くさるものなり、無患子の殼を煎、其汁を澆ば皆死す、又生なる小便を澆ば、み、ず逃去もの也、跡へ水を多くそゝぐべし。

〔剪花翁傳 前編 凡例〕 溫暖の頃、開花の速なるを、冷窖にて保たせる等は素の業なり、然るに冷寒の頃、未開の花を急ぎ、温室に開かせる業などは、人作にして、天時に順はざるに似たれども、さにあらず、椿梅の類は秋より萌して、冷寒の至る迄に漸々咲出しぬれど、寒風霜雪行れては窮し凋みて、暫く開くこと能はず、されど春に至て悉く開花せり、是既に自ら萌し發ける蓄なるが故に、温室に助る時は忽ち開花するもの也、寒風霜雪の候、輕淡なる風土は、秋より冬に續て漸々咲出べしか、ればいまだ萌さざる花を、温室にして開かせるにはあらじ、故に是を辨じ出せり。